第3回有識者会議の宿題事項に関する追加資料について

１．完結出生数について

表　各回調査における夫婦の完結出生児童数（結婚持続期間 15～19 年）

調査（調査年次）	完結出生児数
第１回調査（1940年）	4.27 人
第２回調査（1952年）	3.50
第３回調査（1957年）	3.60
第４回調査（1962年）	2.83
第５回調査（1967年）	2.65
第６回調査（1972年）	2.20
第７回調査（1977年）	2.19
第８回調査（1982年）	2.23
第９回調査（1987年）	2.19
第10回調査（1992年）	2.21
第11回調査（1997年）	2.21
第12回調査（2002年）	2.23
第13回調査（2005年）	2.09
第14回調査（2010年）	**1.96**

注：対象は結婚持続期間 15～19 年の初婚どうしの夫婦（出生子ども数不詳を除く）.

出典：第 14 回出生動向基本調査　結婚と出産に関する全国調査

※完結出生数の動向

・夫婦の完結出生児数が、はじめて２人を下回る。

夫婦の完結出生児数とは、結婚持続期間（結婚からの経過期間）15～19 年夫婦の平均出生子供数であり、夫婦の最終的な平均出生子ども数とみなされる。

夫婦の完結出生児童数は、戦後大きく低下し、第 6 回調査（1972 年）で 2.20 人となった後は、第 12 回調査（2002 年）の 2.23 人まで 30 年間にわたって一定水準で安定していた。しかし、前回調査（2005 年）で 2.09 人へと減少し、今回の調査ではさらに 1.96 人へと低下した。なお、今回対象となった結婚持続期間 15～19 年の夫婦とは、1990 年代前半に結婚した層である。

・出生子ども数２人未満の夫婦が増加

第 7 回調査（1977 年）以降、半数を超える夫婦が 2 人の子どもを生んでおり、今回も同様であった。しかし、子どもを生まなかった夫婦及び子ども１人（ひとりっ子）の夫婦が前回に引き続き増え、これらを合わせると今回はじめて２人未満が２割を超えた。逆に３人以上の子どもを生んだ夫婦は減っており、出生子ども数３人の割合は２割を下回った。

・結婚年齢が高くなると出生子ども数は減少

平均出生子ども数は夫妻の結婚年齢が高いほど少ない傾向がある。たとえば結婚持続期間 15～19 年でみると、妻の結婚年齢が 20～24 歳の夫婦では平均出生子ども数が 2.08 人であるのに対し、25～29 歳では 1.92 人、30～34 歳では 1.50 人となっている。したがって、結婚年齢の上昇（晩婚化）は、夫婦の平均出生子ども数を低下させる効果を持つ。